

箱 (sieg) のなかの「私の席」—"Li Sieges Perilleux"

山 口 恵里子

はじめに

「共同にとる食事のたびごとに、私たちは、すわるようにと自由を招待する。席は空いたままだが、フォークとナイフはずっと置かれている。("À tous les repas pris en commun, nous invitons la liberté à s'asseoir. La place demeure vide mais le couvert reste mis.")」フランスの現代詩人ルネ・シャルルのこのことばを引いて、ハンナ・アーレントは公共的空間のありかたをしめそうとした！公共的空間は、だれもがじぶんの席 (place) をあたえられる空間であり、またその席で他者からの応答を受ける空間でもある。しかし、その席を奪われてしまう人びとがいる。アーレントにとっては、この場所をもたない人びとが、他者の存在を失った「私的」(private)な生に追いやられた者たちなのだ。

「じぶんの席」を喪失した「場所なき者たち」が生まれた状況やかれらの苦境、あるいはその者たちによって提出されたあらたな空間認識について、昨今さまざまな分野でつよい関心がしめされている。他者のなかに「私の席」を探し求める旅は、サミュエル・ベケットのことばをかりれば「すべての座」である母の胎内から、² わたしたちがこの世界にすべり落ちた瞬間からおそらくはじまるのだろうが、本稿ではその場所が具体的な「席」、しかもルネ・シャルルがいう「食席」に「私の席」がもうけられた軌跡を、中世の騎士たちの宴席に探ってみようとおもう。

中世では公共的空間と私生活圏は明確に分割されておらず、王や領主の社会的地位もそれじたいとしては「公的」と「私的」に分化されるものではなかったが、かれらはじしんの封建的権威を公的に表現していた。この代表的具現の公共性は、王や騎士たちが「高貴な」態度を厳格な作法に則って、しかも身体

¹ René Char, *Feuillets d'Hypnos* 131, *Œuvres complètes*, introduction de Jean Roudaut (Paris: Gallimard, 1995) 206. ハンナ・アーレント『過去と未来の間—政治思想への8試論』引田隆一・齋藤純一訳 (みすず書房, 1994) 3. 齋藤純一『公共性』(岩波書店, 2000)も参照。

² Samuel Beckett, *Worstward Ho* (London: John Calder, 1983, 1999) 10.

的にしめすことによって発揮された。かれらは主君権を代表するものとして、「常にいたるところで」礼儀作法にしたがうのであり、支配的地位を表現する特定の「場所」をもっていただけではない。³

このことを例示するかのように、礼儀作法が生まれ、試される場であった宮廷の宴会においても、王や騎士たちは自由に席についていた。といっても、中世では食事時になると、広間に運ばれてきた板と支柱をくみだててテーブルをつくり、出席者はそのまわりで立って食事をとることが珍しくなく、このような食席では、座席そのものに注意がむけられることはなかった。広間は、多くの人びとが集まり、ときには政治的な裁定もおこなわれた空間だったが、その部屋はまた王の私生活圏ともなった。テーブルが片づけられると、王や客はそこで就寝したのである。けれども、しだいに着席して宴卓を囲むことが多くなるにつれて、王や騎士たちの個別的な「私の席」がもうけられるようになる。このとき、アーレントのいう「私の席」は、メタファーとしてではなく、まさに椅子のかたちをとって中世の食席に姿をあらわしはじめるのである。

中世では、共同 (common) と個別 (particular) ということばは、それぞれのうちに public と private という意味合いをふくんでおり、個別であることはいつでも私的であるというわけではなかった。⁴ だが、そのなかで座に求められるようになる個別性 (particular) が、近代的な意味での private な場を出現させていくことになるのではないか。もちろんアーレントのいう「私の席」と中世の「私の席」とのあいだには大きな隔りがある。それを承知のうえで、本稿では、まだ公共世界と私生活圏が分離していなかった中世盛期において、「私の席」がまず特権的な個別の座として発生し、それにともない支配権を公的に表現していた身体が特定の「場所」に定位され、その裏側で「私の場所」を探求欲求が形象化されるようになっていく過程を、椅子というかたちをもつ「席」の出現にみていきたい。その材料として、中世をとおして書きつづけられたアーサー王物語群をとりあげることにする。

³ ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換—市民社会の—カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳、第2版（未来社、1994）18-19。

⁴ 古ゲルマン法の伝統にあった common と particular という区別に、ローマ法思想の publicus と privatus をそれぞれに適用することは暫定的にはできても、個別の特権をもつ王が公共性の代表的具現であるというように、common と particular にはそれぞれに public と private の意味が混在している。ユルゲン・ハーバーマス、17。

冒険の舞台としての寝台

12世紀の後半、フランスはシャンパーニュ伯爵夫人のトロワの宮廷に仕えた詩人クレチアン・ド・トロワは、アーサー王物語の長編を五作著し、その後のアーサー王物語、とりわけ聖杯をめぐる物語の発展に大きな影響を残したことで知られる。そのうちのひとつ『ランスロまたは荷車の騎士』(*Le chevalier de la charrette (Lancelot)*) (1170年代後半から1180年代初め)は、ランスロが、冥界の王に誘拐された王妃グィネヴィアを救出にむかう話である。

ランスロと連れの騎士ゴーヴァンがある城内に入り宿につくと、乙女が二人のために広間の真ん中に大きな寝台(lit)を二台用意する。それらのすぐ側にはより見事なつくりの美しい寝台が置かれていたが、乙女はこの寝台には資格のある者しか横になることができず、もしほかの者が横になれば後悔することになるといふ。しかし、ランスロはこの警告に従おうとしない。

彼[ランスロ]は他の二つの寝台よりは半オーヌも大きな、高い寝台にのり、服を脱いで金星を散りばめた黄金のプロケードのベッドカバーの中にもぐり込んだ。その裏地は毛のふさふさしたりすの毛皮ではなく、黒貂の皮でできていた。彼がもぐり込んだこのベッドカバーはまさに王にこそふさわしいものであった。マットも藁や豆¹⁴幹、はては古いむしろで作った代物ではなかった。⁵

真夜中頃、寝台で休むランスロめがけて、一本の槍が跳んできて、ランスロの脇腹をかすめて寝台をたちまち炎に包む。しかし、擦り傷だけですんだランスロは、起き上がって火を消すと、寝台を降りもせず、ふたたび横になり、なにごともしなかったように寝入るのである。

このエピソードは、クレチアンの遺作『グラアルの物語(ペルスヴァル)』(*Le conte du graal (Perceval)*) (1180-90)で、騎士ゴーヴァンが「不可思議の寝台」(*Li Liz de la Merveille [Lit de la Merveille]*)にすわるシーンを想起させる。「不可思議の寝台」は、ある城の広間の中央におかれていた。それは、

⁵ Chrétien de Troyes, *Le chevalier de la charrette (Lancelot)*, Roman traduit de l'ancien français par Jean Frappier (Paris: Librairie Honoré Champion, 1971) 38. クレチアン・ド・トロワ「ランスロまたは荷車の騎士」神沢栄三訳『フランス中世文学集2愛と剣と』新倉俊一、神沢栄三、天沢退二郎訳(白水社, 1991) 18.

木など全然使われておらず、すべて金づくめ、わずかに例外は紐で、その紐がまたすべて銀だった。この寝台のことは作り話など全くない。紐と紐の間ごとに、小さな鈴が下がっていた。寝台の上に延べてあるのは、大きな錦繡の掛布団だった。天蓋を支える柱のそれぞれに、大きな宝石が嵌めこまれていたが、その輝きの大きいなること、よく燃える四本の蝋燭にもまさっていた。寝台はさまざまな怪物の像の上に乗っており、怪物たちは苦しげに頬を膨らませていた。さらに怪物たちは四つの輪の上に載っており、四つの輪はいかにも軽々と動くので、寝台は指一本で、ちょっと押すだけで、室内どこでも、一方の端から他方の端まで移動しただろう。⁶

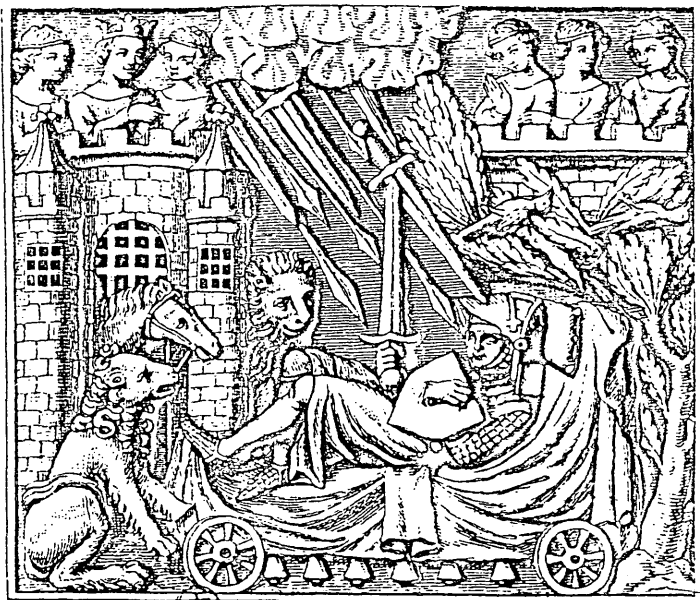
この寝台のうえで休むことを所望するゴーヴァンにたいして、かれを案内した渡し守は、その寝台にすわるか眠るかした者はすべて最悪の死に方をすると警告する。だが、ゴーヴァンがこれを聞かずに寝台に腰をおろすと、矢の群れがかれを襲い、獅子が躍りかかってくる。ゴーヴァンが獅子を退治すると、館の主人があらわれ、館の不可思議の数々が永遠に停止したと告げる。

この場面は、中世写本の細密画や工芸品の装飾の題材としてしばしばとりあげられた。⁷ 図版1の14世紀の象牙の装飾には、車輪のついた寝台に武具に身をかためたまま横たわったゴーヴァンに矢と剣がふりそそぐ場面が彫られている。当時の寝台は縦4メートル、横3.5メートルに達するものもあり、そのような巨大化した寝台は広間の中央に置かれ、騎士の冒険にふさわしい豪華な舞台になった。さらに重要なことは、図版1で、(冒険譚を読む者あるいはそれ

⁶ Les romans de Chrétien de Troyes. V *Le conte du graal (Perceval)*, édités d'après la copie de Guiot (bibl. nat. fr. 794), publié par Félix Lecoy (Paris: Librairie Honoré Champion, 1978) tome II: 49; vv. 7445-7460. クレチアン・ド・トロワ「ペルスヴァルまたは聖杯の物語」天沢退二郎訳『フランス中世文学集2 愛と剣と』新倉俊一、神沢榮三、天沢退二郎訳(白水社, 1991) 284.

⁷ ゴーヴァンと危険な寝台を題材にした中世の工芸品や細密画には以下のようなものがある。Roger Sherman Loomis (in collaboration with Laura Hibbard Loomis), *Arthurian Legends in Medieval Art* (London: Oxford UP, 1938) 参照。Ivory Casket, British Museum. Parisian, c. 1325. Ivory Casket, Metropolitan Museum. Parisian, c. 1325. Loomis, plate nos. 136 & 137. Parisian Ivories. c. 1325. Gawain on the Perilous Bed. Loomis, plate nos. 140. Museo Civico, Bologna, 141: Musée, Niort, 142: Formerly Beboze Collection. Cabinet des MSS, Fonds français, Bibliothèque Nationale, Paris, 12577. Conte del Graal, c. 1330 French School. f.45 Gawain on the Perilous Bed. A Lion. Loomis, plate no. 265. Stadtbibliothek, Berne, AA.91. Parzival. Dated 1467. German School. f. 118. Gawain on the Perilous Bed. Loomis, plate no. 382.

を聞く聴衆に代わって登場したかのような、テキストには書かれていない) 城の女たちがゴーヴァンの冒険をみまもるように、巨大な寝台を舞台にして冒険に挑む騎士の身体が「みられる」対象になったことだ。



図版 1. Gawain on the Perilous Bed. Parisian Ivories. c.1325. Formerly DeBoze Collection. Roger Sherman Loomis (in collaboration with Laura Hibbard Loomis), *Arthurian Legends in Medieval Art* (London: Oxford UP, 1938), pl. 142.

寝台は中世の収納具チェストから発達したものである。チェストは、複数の人が身体をふれあわせながらすわる座具になり、このようなチェストの周囲には、身体を包み込むような触覚的な場があらわれたのだった。⁸

このチェストの触覚的な場から寝台の場への移行をしめす例として、チョーサーが14世紀末に書いた『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*)に登場

⁸ 山口恵里子「チェストの世界—身体的場の原形としての箱」『言語文化論集』(筑波大学) 53 (2000): 17-44.

する巡礼の一人である家扶(Reeve)の話がおもいだされる。家扶は、学生のアランとジョンが、粉屋の一家(粉屋、妻、娘、赤ん坊)と同じ部屋で眠ったことから起きた騒ぎのもようを語る。粉屋は、アランとジョンのために一台のベッドをこしらえてやる。すぐそばには、粉屋と妻が眠るベッドと赤ん坊の揺りかごがあり、そのとなりに娘のベッドが並んでおかれている。真つ暗闇のなか、アランは娘のベッドに忍び込み、ジョンはうまいぐあいに粉屋の妻をじぶんのベッドに連れ込む。

興味深いことに、この娘の寝床が、チョーサーが種本のひとつとした古フランス語の13世紀のファブリオ"Les Meunier et les II clers"では、"huche"、すなわち蓋つきの大きな木箱(grand coffre=chest)となっているのだ。⁹ Hucheは、パン種をこねる台や挽き臼の下におかれて粉を入れる箱にもなったから、粉屋にふつうにおかれた箱だったろう。Hucheはまた、服の収納具やテーブルとしても使われ、さらには後にくわしくみる siege(座具)の代わりにもなったことをここで注意しておきたい。¹⁰ ファブリオでは、粉屋は、娘が愛想をふりまきすぎないように、娘を huche にいれて鍵をかけ、鍵を huche の小さな窓から中に入れてから、じぶんの寝台で眠る。この様子を見ていた cler のひとり

⁹ チョーサーの"The Reeve's Tale"で話される"bed"が種本では「箱」だったという指摘は、筆者が本稿の一部を第15回日本中世英語英文学会全国大会(1999年12月11～12日、於駒沢大学)で口頭発表したさい、池上忠弘氏にご教示くださったものである。この場をかりて池上忠弘氏に深く感謝申し上げます。"The Reeve's Tale," *The Riverside Chaucer*, Third Edition, ed. Larry D. Benson (NY: Houghton Mifflin, 1987) 77-84. "His doghter hadde a bed..." v. 4142.

W. F. Bryan and Germaine Dempster, eds., *Sources and Analogues of Chaucer's Canterbury Tales* (NY: Humanities Press, 1941, 1958) 124-147. Larry D. Benson and Theodore M. Andersson, eds. and trans., *The Literary Context of Chaucer's Fables: Texts and Translations* (Indianapolis and NY: Bobbs-Merrill, 1971) 79-201.

Bryan と Dempster では、"The Reeve's Tale"のソースとして古フランス語のファブリオ"Les Meunier et les II clers"の現存の二写本があげられている(W. M. Hart による)。Benson と Andersson は、それらにくわえて(二写本のうち一編を掲載)、Jean Bodel が書いた"De Gombert et des II clers"(1190-1194)、ボッカチオの『デカメロン』(9.6)、ドイツ語の散文("Das Studentenabenteuer")と詩("Irregang und Girregar")、ラテン語の"Alia Historia de duobus Studentibus, Qui Hospitem cum Uxore et Filia Inebriarunt"、デンマークのバラッド"Møllerens Datter"をとりあげている。問題の娘の寝床は、"Les Meunier"の二写本ではどちらも"huche"と記されているが、これら以外では寝台にあたることばがもちいられている("De Gombert...."では"lit"、『デカメロン』では"letti"、"Irregang...."では"bette"、"Alia Historia...."では"lectum"、"Møllerens Datter"では"seng" ["Das Studentenabenteuer"の原文にあたれなかったが、英訳では"bed"])

¹⁰ *Le Grand Robert Dictionnaire de la langue français*, "huche" (Paris: Dictionnaires Le Robert, 1985) tome. 5, 270. ドイツ語の"Irregang und Girregar"では、娘は「衣裳部屋」に入り、装いを変えてくる。Benson and Andersson, 134, vv. 200-208.

huche に忍びより、娘から鍵をうけとり、中に入り込んで愉しい時を過ごす。チョーサーは huche をベッドに変えた（ほかの類似の作品では娘が眠るのはベッドとなっており、チョーサーがそれらの作品のうちどれかをみたとすれば、huche よりもベッドの方を採用したといえる）のだが、huche の内密性ゆえの愉楽の強度は、家扶が語る（そして他の類似作品の）ベッドに十分に受け継がれている。このような huche とベッドの互換性は、寝台がチェストから発達したことを裏書きするものであり、またその箱や寝台が、家扶の語るアランにとっても、ファブリオの cler にとっても、文字通りの冒険^{アヴァンチュール}の舞台となったことをしめす恰好の例だろう。

けれども、チェストが巨大化して騎士の冒険の舞台となった寝台は、もはや接触の関係を要求せず、みられる者とみる者とのあいだに隔たりをおく劇的な視覚的空間を「室内」に創出したのである。

ペルスヴァルが招かれる寝台

『寝室の文化史』を著したパスカル・ディビによれば、寝台にかんする語彙が出現するのは 12 世紀、すなわちクレチアンが活躍した時代であり、¹¹ 広間の中央で財力や権力を誇示した豪華な寝台は、じっさい訪問客の接見の場として使用された。前出のクレチアンの『グラアルの物語（ペルスヴァル）』で、ペルスヴァルが漁夫王の城を訪ねたさい、大広間の中央におかれた寝台に横たわる漁夫王がかれを傍らにすわらせたのも、寝台が接見の、つまり出会いの場であったからだ（ここでも、チェストの上ですわるときのように横並びにすわるのであって、対面ですわるのではない）。

この『グラアルの物語』の原典のひとつとされるウェールズの古譚『エヴラックの息子ペレディール』（“Peredur the Son of Evrawc”）では、アーサー王の宮廷を出発したペレディールが、老人とともにすわるのはベルベッドのクッションのうえである。ペレディールはつづいて、老人の兄弟の城の広間でその兄弟の隣にすわるが、このときも寝台にはすわらず、¹² 試練もあたえられない。

またべつの典拠とされるルノー・ド・ボージュの詩「見知らぬ麗しき男」(*Le Bel Inconnu*) (c.1190) では、Le Bel Inconnu のニックネームで知られる騎士は、

¹¹ パスカル・ディビ『寝室の文化史』松浪未知世訳（清土社、1990）88, 92, 118.

¹² “Peredur the Son of Evrawc,” *The Mabinogion*, Mediaeval Welsh Romances, trans. by Lady Charlotte Guest, with notes by Alfred Nutt (? 1902) 252-254.

館の広間の中央におかれたテーブルで冒険を経験する。騎士がほかの騎士からの攻撃をかわし、蛇があらわれると、不思議な声が聞こえてき、本名を明かされる。これを聞いた騎士はテーブルのうえで眠りにつく。¹³

このような典拠に比べて、クレチアンがペルスヴァルに用意した舞台は、寝台という豪華な場である。ここが、グラアル登場という有名な出来事の発端の場になる。

とある部屋からひとりの小姓が、	uns vaslez d'une chanbre vint,
白銀に輝く槍の、	qui une blanche lance tint
柄の中程を持って入ってきて、	anpoignée par le mileu,
炉の火と寝台に坐っている	si passe par entre le feu
二人の間を通った。	et ces qui el lit se seoient,

vv.3179-3183¹⁴

この後グラアルを手にした乙女が、二人の寝台の前を通り過ぎる。¹⁵ ここでも、ペルスヴァルと行列を、みる／みられる者に分ける演劇的空間が寝台によって設定されている。古代ギリシア劇をみる観客の坐位は、目の前で演じられる劇

¹³ Renaut de Beaujeu の *Le Bel Inconnu* (c.1190) の要約は、D. D. R. Owen, "The Development of the Perceval Story," *Romania*, 80 (1959): 475-478 を参照。クレチアン・ド・トロワの『グラアルの物語（ペルスヴァル）』の別のソースであるウエルズ古譚『マクセンの夢』では、ローマ皇帝マクセンの夢にあらわれた白髪の老人は、広間の柱の側で象牙の椅子にすわり、チェスの駒を彫っている。老人が立ち上がったという記述がないことから、この老人が不具の漁夫王の原型といわれる (D. D. R. Owen, 487)。マクセンは、老人の前で金色の椅子にすわる乙女の傍らにすわる。椅子は二人でもゆったりすわれるほどの大ききだった。"The Dream of Maxen Wledig," *The Mabinogion, Mediaeval Welsh Romances*, trans. by Lady Charlotte Guest, with notes by Alfred Nutt (? 1902) 85.

¹⁴ Les romans de Chrétien de Troyes. V *Le conte du graal (Perceval)*, étiés d'après la copie de Guiot (bibl. nat. fr. 794), publié par Félix Lecoy (Paris: Librairie Honoré Champion, 1978) tome 1: 101. クレチアン・ド・トロワ「ペルスヴァルまたは聖杯の物語」天沢退二郎訳『フランス中世文学集 2 愛と剣と』新倉俊一、神沢栄三、天沢退二郎訳（白水社、1991）202.

¹⁵ ジャン・フラピエは、グラアルを素晴らしい宝石細工がほどこされた深みのある広口の皿とみている。グラアルは、容器や皿の意味でふつうに使用される単語であり、聖壺や聖盃のような聖遺物ではなかった。ところが、クレチアン以後、聖杯伝説が展開する過程で、グラアルは Saint Graal（聖杯）と同一視されるようになった。ジャン・フラピエ『聖杯の神話』天沢退二郎訳（筑摩書房、1990）参照。

を受容する姿勢であったと指摘されているが、¹⁶ ペルスヴァルも寝台にすわり、グラアルの壮麗な行列を言葉を発することなく、ただみまもるのである。けれどもじっさいは、ペルスヴァルがみられる対象であったことはもはやいうまでもないだろう。ペルスヴァルが「このグラアルで食事をするのはだれか」という問いを発しさえしていたら、漁夫王の傷が癒え、国全体を悲惨から救うことができたはずだった。

クレチアンを種本のひとつとするドイツの詩人ヴォルフラム・フォン・エシェンバッハの13世紀はじめの韻文『パルチヴァール』(*Parzival*) (c.1201-5)でも、グラアルはパルチヴァールが広間の寝椅子に漁夫王とすわったときに登場する。

またそこには百台の寝椅子[krône]が並んでいた。こういう仕事を担当する人たちが用意したのだ。寝椅子の上には百枚のふとんがのせてあった。寝椅子は、互いに少しずつ間隔をおいて並び、四人ずつで一つの席を占め、その前に円形の敷物が置いてあった。(中略) 城主[漁夫王]は命じて自分を真中の炉台のそばの折り畳み式の寝椅子[spanbette]に坐らせた。(中略) あるじは彼[パルチヴァール]をいつまでも立たせず、こちらへ近寄って坐るように言った。「もっと私の方にいらっしやい。あなたをあちらの方に坐らせたなら、他人行儀な扱いになりましょう。」と、苦痛に打ちひしがれているあるじは言った。¹⁷

ここで注目したいのは、クレチアンに比べて、座具へのまなざしが細やかになっていることだ。パルチヴァールが王とともにすわるのは寝椅子(spanbette)であり、この場面のあとでかれひとりで眠るのは別室にある寝台(bette)、騎士がすわるのは4人掛けの寝椅子(krône)というように、座具の使い分けがみられる。このまなざしは13世紀になって生まれたものである。この背景には、広間を主とした一室構造の居住状況から、広間の周囲に小室が付与され、部屋

¹⁶ Richard Sennett, *Flesh and Stone: The Body and the City in Western Civilization* (NY: W. W. Norton, 1994) 60. 劇場で人びとにすわる姿勢をとらせることによって観客として位置づけたのは、政治的な意図によるものであった。屋外のアゴラでは、男たちは立って歩きながら議論した。

¹⁷ Wolfram von Eschenbach, *Parzival*, Text Nacherzählung Worterklärungen (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1967) 193-194, v. 229, 23-230, 30. 邦訳『パルチヴァール』加倉井・伊東・馬場・小栗訳(郁文堂, 1974) 121-122.

が用途別に分かれはじめたという建築形態上の発展があるが、ここでは座具あるいは寝具が部屋によって、またすわる人物によって変化している点が重要である。

とはいえ、このような座具への細やかな視線が 13 世紀に一般的にみられるようになったわけではなく、1220 年前後の創作とされる古フランス語の散文『ペルレスヴォー』(*Perlesvaus*) では、座具への視線はおざなりのままである。たとえば、ゴーヴァンが漁夫王の城で聖杯をみる場面では、広間の象牙のテーブルのところへすわっていたと書かれているのみで、何にすわっていたのかは記されていない。また、この物語では、アーサー王の円卓の座にたいする記述もみられず、円卓の騎士のなかでも特別な騎士の到来を待つのは、後述する「危険な座席」なのではなく、宮廷の柱にかけられている盾であり、それを手にするのはペルレスヴォーである。¹⁸ 盾は、各騎士の紋章を刻み、出自を物語るエンブレムであった。このような持ち物によって騎士を個別化する描写は、13 世紀以前にもみられるが、座の場がある特定の騎士の身体をそこにおさめるのを待っているという状況は、13 世紀初頭にロベール・ド・ボロンによって編み出されるアーサー王物語の登場を待たねばならない。

このように、チェストから発達した寝台は、騎士の冒険の舞台として劇的な空間を「室内」に創出し、チェストのうえでふれあいながらすわった複数の身体間では生じようのなかった空間的隔たりを、「みる身体」と「みられる身体」のあいだにもたらした。このあたらしい空間認識のひとつのあらわれが、人物による座具の使い分けという視線だといえよう。チェストという「物」が形成した場は、このときひとの身体を主体として選びとられる場に変化したとみることができる。

円卓の座席

中世文学のなかでもっとも有名な座は、アーサー王の円卓の座だろう。円卓への最初の言及がみられるのは、1155 年にヴァース師がフランス語で書いた『ブリュ物語』(*Roman de Brut*) である。その円卓では、みな平等に、そしておそらくは身体を相接しあいながらすわっていた。

¹⁸ *Le Haut Livre du Graal: Perlesvaus*, ed. William A Nitze & T. A. Jenkins, 2 vols. (Chicago: Chicago UP, 1932-37); English trans. by Nigel Bryant, *The High Book of the Grail: A Translation of the Thirteenth Century Romance of Perlesvaus* (Cambridge: D. S. Brewer, 1978) Branch IV & Branch IX.

アーサーの貴族についていえば、だれもが自分のことを最高だとおもい、最低だというものはいなかった。アーサーは円卓をつくった。ブリトン人が多くの伝説で語ったのはこの円卓のことである。そこにアーサーの家臣も、すべての貴族も、みな平等にすわった。かれらはテーブルに平等にすわり、平等に給仕されたのだ。だれもほかの者よりも高い席にすわるなどと自慢することはできなかった。¹⁹

イングランドで教区司祭の職にあったラヤモンは、ヴァースの物語を英語に翻案した『ブリュ物語』(1189-99)を著したが、そこでこの部分が具体的になって拡大される。それによると、クリスマスの季節にロンドンで、アーサー王治下の7人の王と700人の騎士が集った。それぞれが、密かに誇りを抱き、自分をもっとも優れているとかがえていた。テーブルが用意されると、まずアーサー王がすわり、その隣に王妃、つづいて伯爵、男爵、騎士、自由民、田舎の者、ポーターの順に席についたが、この席順について言争いがはじまり、死傷者をだす始末となった。後日、アーサー王がコーンウォールに出向いたおり、騒ぎのもようを聞いた大工が王に1600人余りの者がすわれる円卓をつくることを申し出る。それは、持ち運び可能で、だれもが好きなどころにすわれるテーブルで、席の上下もないものだという。大工は、木材を調達してもらい、4週間で円卓をつくりあげ、アーサー王に献上する。

このラヤモンの記述とヴァースとの相違点として興味深いのは、ラヤモンが、王が早速宴会を開くと、円卓に席の上も下もなく別々にひとりずつすわった ("alle heo weoren bi ane :/ þe heh3e & þa la3e" (MS. Cott. Calig. A. IX; vv.

¹⁹ Pur les nobles baruns qu'il out;
Dunt chescuns miendre estre çuidout,
Chescuns se teneit al meillur,
Ne nuls n'en saveit le peiur,
Fist Artur la Roïnde Table
Dunt Bretun dient mainte fable.
Illuec secient li vassal
Tuit chevalmente tuit egal;
A la table egalment secient
E egalment servi esteient;
Nul d'els ne se poeit vanter
Qu'il seïst plus halt de sun per, vv. 9747-9758.

Roman de Brut de Wace, éd. Ivor Arnold, 3 tomes (Paris: Société des Anciens Textes Français, 1940) 2.513-514.

22947-8)²⁰と書いた点である。このように記したということは、ラヤモンが円卓のまわりにおかれた座具を、接触しあいながらすわるというよりも、ひとりずつ別々にすわる椅子として想定したとかがえられる。

しかしながら、この記述も、1600人余りが円卓にすわったとなると、現実離れしていることは否めない。また、ヴァースもラヤモンも家臣らがテーブルにすわる ("A la table egalment seeient," Wace, v. 9755; "sæhte to borden." *Lazamon*, v. 22880)と書いており、席順が争いの種となったにもかかわらず、肝心の座席については言及がみられないのである。テーブルが、壁に据えつけられたベンチやチェストのほうにひきよせられて組み立てられた当時にあつては、テーブルをどこに置き、そのテーブルのどこにすわるのか、あるいは立つのか、重要なのであつて、座具そのものは二の次となる。じっさい、アーサー王の宴会を描いた細密画では、王や騎士たちがテーブルのまわりに立って食事をとる場面を描いたものも少なくない。²¹

けれども、12世紀末のラヤモンが、騎士が円卓のまわりに「ひとりひとり別々にすわった」と記したことは、12世紀初頭のヴァースとの相違点としておさえておかなければならない。前にふれたクレチアンの『グラアルの物語 (ペルスヴァル)』のソースのひとつで、少なくとも12世紀以前には原形が知られていたウエールズ古譚の『エヴラックの息子ペレディール』では、アーサー王の宮廷の広間で騎士たちは、床に敷いたベルベッドのカーペットのうえにすわっていた。²²このウエールズ古譚から、ヴァース、そしてラヤモンと時を経るにしたがつて、個別の座への意識が芽生えていることがあとづけられるだろう。みなが平等にすわっていた共同的な(common)座が、個別的な(particular)座に変容していくのである。

円卓の起源については諸説があるが、ケルトの伝承に由来するという見方が主流である。ケルト人の習慣では、王や勇敢な兵士のまわりに、部下の兵士たちが円陣をくんですわったという。あるいは、アーサー王を軸として回転する

²⁰ *Lazamon's Brut: or Chronicle of Britain*, a poetical semi-Saxon paraphrase of the Brut of Wace, 3 vols. (London: the Society of Antiquaries of London, 1847; rpt. NY: AMS Press, 1970) 2. 532-541; vv. 22737-22953; "alle bi one! / þe hehe an þe lowe." (MS. Cott. Otho, C. XIII, vv. 22947-8).

²¹ 流布本物語 14世紀初頭 (British Museum MS. Royal 14. E. III. 89葉) など。

²² "Peredur the Son of Evrawc," *The Mabinogion*, Mediaeval Welsh Romances, trans. by Lady Charlotte Guest, with notes by Alfred Nutt (? 1902) 281.

ケルトの神々をあらわすという説もある。²³ こうしたケルト人の世界に連なる円卓は、13世紀のフランスにおいてキリスト教文化のなかにとりこまれていくが、その過程、つまり12世紀から13世紀への世紀の移り目に、最後の晩餐のイメージが円卓に重ねられ、²⁴ 12人の使徒が12人の騎士となり、12の席が円卓に設定されていく。その基点をつくったのが、フランスのロベール・ド・ボロンである。

ボロンは『メルラン』(*Merlin*) (c. 1200)で3つのテーブルの起源、すなわちキリストの最後の晩餐のテーブル、アリマテヤのヨセフの聖杯のテーブル、そしてメルラン(英語名マーリン)がつくったという円卓について語る。最初の二つのテーブルには12席あり、それにくわえてユダの席とされる空席がある。第3のテーブルの円卓は、メルランがアーサーの父ウーサーに依頼されて、50人の騎士が着席できるようにつくったものであり、メルランは一席だけを空席にしておくように忠告する。その席は、聖杯探求に成功した騎士だけがすわることのできる席だという。

一席だけ空席にしておくという警告は、ボロンの『聖杯の由来の物語』(*Le roman de l'estoire dou graal*, 別題『アリマタヤのヨセフ』*Joseph d'Arimathie*)²⁵にもみられる。そこでは、空っぽのユダの場所(*le liu Judas*)にすわろうとしたモイゼスにたいする懲罰が記されるが、そのさいボロンはこの席をユダの「場所」とよび、座具そのものには特別な注意を払ってはいない。

円卓ができた時点では、ヴァースが記したように人びとは席順に関係なく大人数がすわっていた(*common*)が、12世紀末に曖昧ではあるけれどもラヤモン

²³ "Round Table," *The New Arthurian Encyclopedia*, ed. Norris J. Lacy (NY: Garland Publishing, Inc., 1991) 391.

²⁴ 最後の晩餐の場面に円卓が規則的にあらわれるようになるのは11世紀であり、12世紀半ばまでには円卓は *divine fellowship* のシンボルとしてもちいられるようになった。Laura Hibbard Loomis, "The Table of the Last Supper in Religious and Secular Iconography," *Art Studies*, V (1927): 72. 12世紀以前の西欧の日常生活では円卓は一般に使用されておらず、長方形の板を脚にのせただけのテーブルが食事時に組み立てられた。にもかかわらず、12世紀以前の宴会を描いた絵には円卓が登場する。L. H. ルーミスはこの由来を、古代ギリシア・ローマ世界と中東にたどる。Laura Hibbard Loomis, 79.

²⁵ *icil lius wiz si senefie*

Le liu Judas, qui par folie

De nostre compeignie oiissi

Quant s'aperçut qu'il m'eut trahi. (vv. 2527-30)

Robert de Boron, *Le roman de l'estoire dou graal*, édité par William A. Nitze (Paris: Librairie Honoré Champion, 1971) 87.

によって「ひとりずつ("bi ane")」すわる個別(particular)の座への視点がはさまれたこと、そしてボロンにおいて空席のままにしておく一席がもうけられたことは、チェストが形成した空間とは異質な空間認識が生まれたことをしめすものだろう。冒頭に引いたルネ・シャルのこのような食席の空席は、このときからすわる人を待ちつづけているのである。

そのエポックメイキングな出来事として、13世紀初めの『ディド・ペルスヴァル』(*The Didot-Perceval*) (c.1220-30) とよばれる古フランス語散文においてペルスヴァルが「ユダの場所」に無謀にもすわってしまうという事件をつぎにとりあげたい。

「ユダの場」から「聖石の場」へー『ディド・ペルスヴァル』

『ディド・ペルスヴァル』には二種類の写本(モデナ写本[Ms. E. 13世紀後半]とディド写本[Ms. D. 1301年])が現存しているが、それらの作者がボロン自身なのか、あるいはボロンの作品をだれかが継承したのか、あるいはボロンの作品を参照しつつだれかが別の作品として書いたのかはつまびらかでない。しかしここでは、作者や成立過程の議論よりも、空席にしておかなければならないとされたユダの「場所」にペルスヴァルがはじめてすわろうとしたことが問題である。

アーサー王(roi Artu)は、メルランの勧めにしたがって聖霊降臨節に円卓を再生するために宴会を開く。12人の騎士が12の席につくが、アーサー王は13番目の席をユダがすわった場所(... si prist li rois les doze pers et les fist asseoir es doze lius, et li tresimes remest vuis por le senefiance del liu u Judas sist quant il se leva; Ms. E. 64-66)として空席のままにしておく。

馬上槍試合でペルスヴァルが騎士たちを敗ると、観客のなかから「円卓の空席にすわるのにふさわしい騎士だ」という声があがる。²⁶ その声を聞いたペルスヴァルは、円卓の空席にすわることをアーサー王に要望し、王の反対と警告に反して、そこにすわる。すると、ペルスヴァルの下の石が割れ、地がうめき声をあげ、はるかかなたまで暗闇で覆われてしまう。やがてどこからともなく

²⁶ "Et disent que bien devoit le liu de le Table Reonde aemplir, et li rois qui molt fu vaillans et sages s'en vint a Perceval..." (Ms. E. 155-156); "...si que tuit cil que le virent distrent qu'il estoit le mieudres chevaliers del monde, et bien devoit le leu voit aemplir de la Table Ronde" (Ms. D. 139-141). *The Didot-Perceval*, According to the manuscripts of Modena and Paris, ed. William Roach (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1941) 147-148.

声が聞こえてくる。声は、メルランの命令に背いてその席にペルスヴァルをすわらせたアーサー王を非難し、つづいて円卓の騎士のひとりが他の騎士より騎士道において秀で、神の助けによって漁夫王の館で聖杯について問うてはじめて漁夫王の病が癒え、ペルスヴァルの下で割れた石が元通りになるという。この声を聞いた円卓の騎士たちは、聖杯探求の旅に立出する。

ペルスヴァルが 13 番目の席にすわる直接の誘因は、馬上槍試合のさいの観客の賞賛の声であり、ストーリーの展開をかながえれば、作者はその声の重要性をもっと強調してもよかつたはずである。けれども、現存の二写本にみられる観客の声の描写があまりに簡単であることから、『ディド・ペルスヴァル』の刊本を編集したウィリアム・ローチは、ロベール・ド・ボロンが創案したエピソードを、この話の重要性を理解しきれなかつた写本の校訂者が凝縮して書いたと説明する。²⁷ これをふまえれば、13 番目の席にすわるというペルスヴァルの行為を元来考案したのはボロンであり、そのさいボロンは、『アリマタヤのヨセフ』と『メルラン』で記した「ユダの場所」という特定の席の名をそのまま援用したとかながえられる。²⁸

二つの写本に書かれたこのエピソードをみると、それぞれペルスヴァルがすわる席は、「空の場所」("el liu vuit" [Ms. E. 182], "le leus voit" [Ms. D. 164])と記され、座具には視線が注がれていない。しかし、ペルスヴァルがすわると「かれの下の石が割れた」("Et tant tost com il fu assis li pierre fendu desous lui" Ms. E. 193)、あるいは「ペルスヴァルがすわった円卓の場所の石は元通りにはならないだろう」("ne ne sera li pierre rasoldee del liu de le Table Reonde u Percevaus s'asist" Ms. E. 211-212)と記されていることから、石が 13 番目の「場所」の象徴としてペルスヴァルの下におかれていたことが明らかである。

この石はいわば聖なる力を顕現する聖石であり、²⁹この時点で「ユダの場所」

²⁷ *The Didot-Perceval*, According to the manuscripts of Modena and Paris, ed. William Roach (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1941) 43-44.

²⁸ Rupert T. Pickens, "《*Mais de çou ne parole pas Crestiens de Troies...*》: A Re-examination of the *Didot-Perceval*," *Romania*, 105 (1984): 496. R. T. ピッケンズは、*The Didot-Perceval* の作者が『アリマタヤのヨセフ』と『メルラン』を参照しつつ、クレチアン・ド・トロワの『グラアルの物語(ペルスヴァル)』とその統編の聖杯物語を主として組み合わせたと主張する。

²⁹ ミルチャ・エリアーデ『豊穡と再生—宗教学概論 2』エリアーデ著作集 第 2 卷 久米博訳 堀一郎監修(せりか書房, 1974) 118, 121-123. 聖石が玉座の下に置かれるという例はすでに、*Heimskringla* 中の "Herald's saga Fairhair" にみられる。このことをご教示くださった伊藤盡氏に深く感謝します。

という否定的な席が、聖なる席に転化していることに注目したい。聖石はそれだけで空間を聖別するいっぽうで、石を積み重ねて空間をとりかこむことによって呪術的な防禦壁をつくった。その空間の中心は「臍」（オンファロス）的の石と同一視される。³⁰ 聖石とそれをとり囲む防禦壁のあいだには分ち難い関係性があるが、じっさい、ベルスヴァルがすわった聖石が、防禦壁の意味を併せもっていくさまを、わたしたちは 13 世紀初頭に書かれた作者不詳の散文『聖杯の探索』（*La Queste del Saint Graal*）でこれから目にするようになる。

Li Sieges Perilleux — 特権的座の発生

『聖杯の探索』にも、三つのテーブルの話が記されている。それによると、イエス・キリストが到来して以来、世界には三つの重要なテーブルがあった。第一のものは、天からの食糧でイエス・キリストの使徒の肉体と魂を支えたテーブル（la Table Jhesucrist）である。第二のテーブルは、アリマテヤのヨセフの聖杯のテーブル（la Table dou Saint Graal）で、パンを争った人びとを怒ったヨセフが、パンをちぎってまき散らし、聖杯をテーブルの上座にすえると、12 個のパンはまたたくまに増えて 4000 人もの人が供されたという。聖杯のテーブルには最後の晩餐の席を手本とした、ヨセフの息子ヨセフェがすわるべき席（un siege ou Josephes ... devoit seoir）があり、この席にはほかの者がすわることは許されなかった。ところが、ヨセフェに嫉妬をおぼえた二人の男がこの席にすわるとすぐに、奇蹟がおり、その男どもは大地に呑み込まれてしまう。以来、ヨセフェの席は「恐怖の座席」（li Sieges Redoutez）とよばれるようになった。この席の典拠は、前述のロベール・ド・ボロンの『メルラン』に登場する「ユダの場所」とされる。その場所が 13 世紀初頭の物語で、“Sieges”という特権的な座席を意味する単語をもちいて記されることになるのである。

この“siege(s)”が、第三のテーブル、すなわちメルランの進言によってつくられた円卓（Table Reonde）にも設けられる。12 世紀のヴァースやラヤモンの記述において座順のない平等な席だった円卓の座が、この 13 世紀の物語において指定席へと変化したのである。メルランは、円卓の騎士団をとおして「聖杯」の真理を知ることができると予言する。これを聞いた人びとが、聖杯探求に成功する騎士以外の者がすわることのできない特別の座席（un propre siege）をつくるように頼むと、メルランは「他のどれよりも大きくて美事な座席（un

³⁰ ミルチャ・エリアーデ, 123-125.

siege entre les autres grant et merveilles)」を造った。ここにすわる資格のある真の騎士以外のものでここにすわるものは死ぬか不具の傷を負おうことになる、とメルランは宣言し、その座席を「危険な座席(li Sieges Perilleux)」とよぶ。³¹ この座席は、前出の『ディド・ペルスヴァル』でペルスヴァルが無謀にもすわろうとした石の座から発展した席であり、そこは元来「ユダの場所」として了解されていた席であったことをおもいだしたい。その「場所」が、“li Sieges” としてかたちをそなえた具体的な事物として認識されるようになったのだ。「危険な座席」は、もはや石という聖なる力の顕現する象徴的な形象ではなく、ほかの席よりも立派な椅子がおかれた具体的な席になった。石が聖別した場所は、他の席と隔てる囲いをもつ「座席」になったのである。³²

Siege は、ラテン語の *sedere* (=to sit)、俗ラテン語の *sedicare* (=to sit)、*sedicum* (=seat) を語源とし、中世では「特権的な座」と「包囲する」という二つの意味をもっていた。特権的な座という意味は、人が位置づけられる場所として拡大解釈されるようになる。ちなみに、おなじラテン語の動詞に由来するドイツ語の *besitzen* は占有を意味する。さらに、ここで注目したいのは、「人が位置する場所」という意味から派生して、フランス語の *siege* は、12世紀の最古の用例から「包囲するために要塞のまわりに軍隊を配置する場所」(1138年頃, *sege*) という意味をそなえていたことである。おなじ12世紀の前出のクレチアンの『グラアルの物語(ペルスヴァル)』では、邪な騎士に *siege* されたブランシュフルールは、糧食が尽き、明日には敵の手に落ちてしまうと、ペルスヴァルに助けを求める(v. 2011)。この *siege* は、攻囲の意である。³³

³¹ *La Queste del Saint Graal: Roman du XIII^e siècle*, édité par Albert Pauphilet (Paris: Librairie Honoré Champion, 1949) 74-78. 邦訳『聖杯の探索』天沢退二郎訳(人文書院, 1994) 120-124.

³² このことは、13世紀のドイツの都市をモデルにして *siege* を論じた Michael Toch の、13世紀に都市の発達にあわせて、それを取り囲む壁が強化、拡大されたという指摘と関係があるのかもしれない。Michael Toch, "The Medieval German City under Siege," *The Medieval City under Siege*, ed. Ivy A. Corfis & Michael Wolfe (Woodbridge: The Boydell Press, 1995) 35-48.

³³ *Dictionnaire historigüe de la Langue française* (Paris: Dictionnaire le Robert, 1992) 1941-2, "siege".

1230年前後のフランス語の散文『アーサーの死』には、座席あるいは攻囲の意の *siege* が混在して使用されている。王妃とランスロが関係が続いているのを知った王は、居城に諸侯を参集する。すでに円卓の騎士の多くが、ランスロとの戦いによって命を落としていた。そこで騎士ゴーヴァンは、それらの騎士の代わりを選出し、以前とおなじ人数の150名に円卓の騎士を揃えるように王に進言する。ランスロの席(*el siege Lancelot*)だったところには、エリアンがすわり、ランスロに従ったボオルとエクトルの席(*el siege Boors, el siege Hestor*)、そしてランスロに殺されたガエリエの席(*el siege Gaehriet*)にもあらたな騎士が選ばれた。だが、だれも「危険な座席」にはすわらなかった("Mais, sans faille, el souerain siege de la Table Reonde, ki ia dis ot este

英語で *siege* が包囲の意でもちられるのは、14 世紀以後のことである。たとえば、14 世紀の英語頭韻詩『アーサーの死』(*Le Morte Arthur*) には、アーサー王は、王妃との密会が暴かれ、Benwick に逃れたランスロットを *siege* すると記されている。作者(不詳)は、じっさいの戦争行為を詩のなかに故意に組み込もうとしたらしい。³⁴ このように、城塞の攻囲が中世の最終的な戦闘法だったのであり、内部の *siege* にすわる人を包囲する、それが戦術としての *siege* だったのである。³⁵

これまで、戦術としての *siege* については多くの研究がなされてきた。³⁶ *Siege* は、キリスト教徒とイスラム教徒の戦いの前線に位置した宗教的な砦であり、

apieles li Sieges Perilleus, not si hardi ki si osast aseoir,..."). 翌朝、アーサー王一行は、ランスロの城「喜びの砦」を攻囲(*siege*)する。*Mort Artu: An Old French Prose Romance of the XIIIth Century Being the Last Division of 'Lancelot du Lac,'* ed. J. Douglas Bruce (Halle: Max Niemeyer, 1910; rpt. NY: AMS Press, 1974) 125-126.

³⁴ *Le Morte Arthur: a Romance in Stanzas of Eight Lines*, re-edited from MS. Harley 2252, in the British Museum by J. Douglas Bruce, published for the Early English Text Society (London: Oxford UP, 1903; rpt. 1959) stanzas 341 (by-segyd), 343, (sege) & 370 (sege). Winthrop Wetherbee, "Chivalry under Siege in Ricardian Romance," *The Medieval City under Siege*, ed. Ivy A. Corfis and Michael Wolfe (Woodbridge: The Boydell Press, 1995) 209.

³⁵ フランス語では *siege* の座席としての意味が今日でも残っているのにたいし、英語の *siege* では包囲の意がつまり、座席の意は 17 世紀頃に失われる。それは英語には、*siege* とラテン語の語源を等しくする *seat* があったからだろう。中世では、*seat* は坐の形態や作法を主に表したが、座席の意では *siege* と *seat* がともに用いられた。ただ、「包囲」を含意する *siege* は、他者とは画された固有の席という語感が強い。15 世紀末のトマス・マロリーは座席に *siege* と *seat* の両方を用いるが、コンテクストによって使い分けている。Sir Thomas Malory, *Works*, ed. with an introduction by Eugène Vinaver (Oxford: Oxford UP, 1971) 参照。以下、Malory からの引用はすべてこの Vinaver 版による。

たとえば、アーサー王が騎士に叙任したトリストラムを宮廷に連れてきたさい、王は円卓の座席 (*seges*, *syege*) をみると、マルホルトの座席だったところに「ここは気高き騎士サー・トリストラムの座席である」という文字をみつける(マルホルトはトリストラムとの戦いで敗れ、死んだ騎士)。この描写では座席に、*seges* あるいは *syege* が用いられている。トリストラムの様子をみにきたマルク王の問いに答えて、騎士が「トリストラムの座席はマルホルトの座席があったところで」と答える場面では、座席には *seat* (e) が使われている (Malory, Book X, vi-vii)。これらを比較すると、おなじ円卓の座席に言及するばあいも、円卓を目の前にしたときは *siege* を用い、円卓から離れているときには *seat* が使われているといえる。円卓の座席は、それぞれの騎士の名前が記された固有の席であり、ほかの者がすわることはできない。*Siege* は目にみえない壁で囲まれた座である。座席に名が記されるということだけで、騎士はその場を占有しているのだが、*siege* の座はそのイメージをいっそう強固なものとする。

³⁶ 戦術としての *siege* のさまざまな側面については、Ivy A. Corfis & Michael Wolfe, eds., *The Medieval City under Siege* (Woodbridge: The Boydell Press, 1995) を参照。

ヨーロッパと非ヨーロッパの境界だった。¹ Siegeの壁は都市を形成し、中心とともに周縁地域を都市に生み出した。壁のなかでは、siegeの管理上の諸権利や経済的な負担をとりきめる領主と被支配層の力のバランスをめぐる、あるいは戦術を高めるための権謀術がくりひろげられた。中世後期に大砲が出現するなどの武器の技術的な進歩は、siegeの戦術を大きく変えることになる。Siegeはまた、『薔薇物語』をはじめとする中世のロマンスや詩に多様なイメージを提供し、アレゴリーの源泉にもなった。Siegeの砦は、貴婦人の心や(貞節かつ性的対象としての)身体と、その女性を想う騎士の苦悩を表現したばかりか、教会や聖母マリア、魂のイメージをとどめてきたのだった。このように siegeは、豊かなイメージを喚起しながら、「座」としてそこにすわる人の身体を包囲した。この「座」としての siegeがここではたいせつである。

前述したように、「危険な座席」は「ユダの場所」が聖石の力によって転化した siegeである。その座につく人はそれゆえ、選ばれた者でなければならない。「ユダの場所」を、ペルスヴァルがすわったことによって聖石が割れて暗闇で覆われた世界を、あがなう者でなければならないのである。

『ディド・ペルスヴァル』で割れた石が元通りとなるには、ペルスヴァルが幾多の冒険を経た後、漁夫王の城を二度めに訪れたさい、聖杯の行列をみるやいなや運ばれている容器はだれのために使うのか("dites moi que on sert de ces choses que je voi illuec porter" (Ms. E. 1837-38); "je vos pri que vos me diez que l'en sert de cest vessel que cest vallet porte que vos tant enclinez" (Ms. D. 1505-6))と問うことによって、漁夫王の傷が癒え、グラアルの秘密が明かされ、世界が魔術から解き放たれたときだった。³⁸ その日、アーサー王が円卓につくと、恐ろしい音が聞こえ、ペルスヴァルの下でかつて割れた石がつなぎあわさ

¹ チョーサーの『カンタベリー物語』の巡礼の一人である騎士は、1344年にスペインのアルゼシラスの街がグラナダのムーア人と包囲戦(seege)を展開したとき、グラナダにいた。("General Prologue," A56)

³⁸ ペルスヴァルは、漁夫王の城を最初に訪問したさい、この質問を発することに失敗している。そのとき、ペルスヴァルはクレチアのペルスヴァルのように、広間の豪華な寝台に案内され、つづいて漁夫王もその寝台に担がれていき、すわって多くのことを話す。("Et Percevaus en monta amont en le sale, et uns vallés li aporta un mantel d'escharlate et li afubla, et puis l'enmena | seoir enmi le sale en un molt rice lit." (Ms. E: 1194-97). ; "Lors se r'asissent sor le lit et parlerent entre aus de plursors choses..." (Ms. E: 1207-08). "Et Percevaus monta en la sale et dui vallet li aporтерent un mantel d'escarlate cort et li afublerent, et le firent seoir sor un riche lit en la sale. (Ms. D. 1059-61); Lors s'asistrent sor un lit et pallerent de plushors choses..." (Ms. D. 1070-71)) *The Didot-Perceval*.

れるのである。³⁹ ペルスヴァルは、漁夫王から聖杯をひきつぎ、王が亡くなった後は、みずから漁夫王となり、天と地をつなぐ聖杯の城を守っていく。聖性を帯びたペルスヴァルは、城の *siege* のなかにみずからの座 (*siege*) を得たのである。

ペルスヴァルはしかし、聖石にふたたびすわることはなかった。ペルスヴァルに代わる *siege* にすわる騎士として、わたしたちは、13 世紀のアーサー王物語群に登場するガラアド (英語名ガラハッド) の名をみることになる。ガラアドが最初に登場するのは、メルランが造った「危険な座席」(*li Sieges Perilleux*) が現れる前出の『聖杯の探索』においてである。その場面をみてみよう。

聖霊降臨節の食席で、アルチュール (アーサー) 王は円卓でもひときわ高い席につき、騎士たちもおのおのの席につく (*Et li rois fet l'eve corner; si s'asiet en son haut dois, et li compaignon de la Table Reonde s'asieient chascuns en son leu*).⁴⁰ 円卓の席は、騎士の指定席、個別的な座として意識されている (『聖杯の探索』を典拠のひとつにして『アーサーの死』を著したトマス・マロリーも円卓の座席に "*siege (syege, sege)*" をもちい、"*en son leu*" に倣って "*hys owne place*", "*every syege (sege)*" と記し、⁴¹ また "*every knyght knew hys owne place and sette hym therein*" とも書いているように、騎士はじぶんの席をもち、その場所を知っている⁴²)。だが、「危険な座席」は空席となったままだ。そこに老人が騎士をつれてきてその席に導くと、椅子には「ここはガラアドの席 (*CI EST LI SIEGES GALLAD*)」という文字が刻まれており、騎士はそこに腰をおろす。この騎士がガラアドである。⁴³

この場面を描いた 14 世紀の写本をみると、円卓の騎士がすわる椅子は、ま

³⁹ *Et estoit a cel jor meïsmes li rois Artus a le Table Reonde que Merlins fonda, et oïrent un escroisissi grant que il s'en esfreerent molt durement, et li pierre rasolda qui fendi desos Perceval quant il s'asist el liu vuit* (Ms. E. 1892-96). "*Et estoit icel jor meïsmes le rois Artus a la Table Ronde que "Mellins fonda, si oun escrois si grant que tuit si home s'i enfreïrent, quar la pierre resounda quifonsi desouz Percevaux, si lor vint a grant merveille que il ne savoient que ce senefiot"* (Ms. D. 1545-48).

⁴⁰ *La Queste del Saint Graal; Roman du XIII^e siècle*, édité par Albert Pauphilet (Paris: Librairie Honoré Champion, 1949) 7.

⁴¹ Malory, Book X, vi, 352.

⁴² Malory, Book XIII, iii, 518.

⁴³ *La Queste del Saint Graal: Roman du XIII^e siècle*, édité par Albert Pauphilet (Paris: Librairie Honoré Champion, 1949) 8. Cf. Malory, Book XIV, 477, Book XIII, ii-vi. 516-519.



図版 2. Galahad Comes to the Siege Perilous. Cabinet des MSS, Fonds français, Bibliothèque Nationale, Paris, 343, f. 3. *Queste*. c.1380-1400. Italian School. Roger Sherman Loomis, pl. 330.

るく連なる椅子で座席ごとに仕切りがついており、"chascuns en son leu"という固有の座席が視覚的に表現されている（図版 2）。しかし、この椅子は個々に独立した椅子ではない。そのなかで唯一、天蓋をもち、文字が刻まれた背当てと側板がついた「危険な座席」が個別（particular）の椅子として描かれている。⁴⁴ この箱型の椅子は、チェストを縦にして内部をくりぬいた形態をしているように、チェストから発達したものであり（huche が siege の代わりとして

⁴⁴ L. H. ルーミスは、この細密画とアッジジにみられる最後の晩餐を描いた絵画との類似を指摘し、細密画家がアッジジの絵を念頭に制作した可能性を検証した。Laura Hibbard Loomis, 73-74.

使用されたという前述の箇所を想起されたい)、これにすわるものは、文字通り箱のなかにすわることになるのである。⁴⁵

このような「危険な座席」に着いたガラアドを描いた 14 世紀末の細密画をみると、天蓋がつき、箱空間を形成する椅子にすわるガラアドは、まさにその空間に包囲され、周囲の騎士たちと空間を画している (図版 3)。ガラアドは、いわば *siege* (特権的な座) に *siege* (包囲) されるという状態にあるのだ。



図版 3. Galahad in the Siege Perilous. Cabinet des MSS, Fonds français, Bibliothèque Nationale, Paris, 120, f. 524^v. Repainted. c. 1460.

Roger Sherman Loomis, pl. 287.

⁴⁵ ここで、chair についてふれておく。Chair の語源はギリシア語の *κατα* (=down) と *έδρα* (=seat) からなる *καθέδρα* (seat, chair, pulpit) である。それがラテン語で *cathedra* と変化し、フランス語で *chaire*, *chaere* となったものが 14 世紀に英語のなかに入った。また、ギリシア語の *έδρα* は、ラテン語で *sed* となり、すわるという意味の *sedere* という語に派生した。

中英語の *chair* は、身体を楽にしてすわることのできる、背当てのついた座具をいった。チョーサーの『カンタベリー物語』の巡礼の一人である修道僧によれば、『マカベア書』(聖書外典) に書かれる高慢なアンティオクス王は神の復讐によって戦車から落ち、歩くことができないほどの傷を負い、*chayer* にのせられて運ばれた ("The Monk's Tale," B3803)。また、マロリーの『アーサーの死』で、ガラハッドらの前に聖杯とともにあらわれた年老いたヨセフは 4 人の天使に担がれた *chayre* にすわる (Malory, Book XVII, xx)。快適な *chayer* は、致命傷を負った王や老齢のヨセフを運ぶのに適した座具だった。

このような *chair* にすわることのできる者は、統治者、聖職者、裁判官、教授だったことから、*chair* は王座や高位の人物がすわる座の意味をふくんで、かれらの権威を象徴するようになった。Siege も高位の者の座を意味したが、"Perilous Siege" という名称にみられるように、その座が周囲とは画された空間であることを含意する。

Aventure (冒険・出来事) のかたちとしての siege

『ディド・ベルスヴァル』では、ベルスヴァルがいくつもの冒険を乗り越えたことによって、割れた石が最終的に元通りになったが、ベルスヴァルの冒険の堆積は、「石」が象徴する世界のなかにベルスヴァルを位置づけただけで、かれに「私の場所」としての「席」をあたえてはいない。だが、『聖杯の探求』に登場したガラアドには、かれだけがすわることができる特権的な siege 「危険な座席」がもうけられている。しかも、ガラアドがその座席にすわるという行為は、^{アヴァンチュール}冒険の反復のうちに出現した運動であり、その椅子はまさに冒険にあふれた「かたち」、あるいは冒険の反復から生じた「出来事」として在る。

宮廷に現れたガラアドが「危険な座席」にすわる直前、椅子には、「聖霊降臨節の日に、この座席はその坐り主を得べし」と書かれていた。この文字を見て、円卓の騎士たちは、「Par foi, ci a merveilleuse aventure!» (「さてもこれこそは驚くべき出来事だ!」)と口々に言う。また、宮廷では、^{アヴァンチュール}出来事が訪れなければ食卓につくことができないという習慣があり、その出来事として、巨大な岩に剣が刺さるという奇蹟がおこる。だが、だれもその剣を抜くことはできないまま、騎士たちが食卓についたところに、ガラアドが登場し、前述したように「危険な座席」にすわるのだ。王は、不可思議な出来事から国を解放するために、ガラアドに「聖杯の探索」の冒険を成就するよう願う。そこでガラアドは、あの岩から剣を抜くという奇蹟を披露し、さらにはかれの先祖にあたるアリマタヤのヨセフから伝わる盾を冒険によって身に帯び、座の主であることを証明する。⁴⁶

このように「危険な座席」には、その座につくにふさわしいガラアドによって可能となる冒険がすでに潜在しており、その^{アヴァンチュール}冒険が、ガラアドがすわるという身体による実在化(realization)の運動によって、世界に「身体的場」としてかたちを現したのだ。この場のなかにはまた、ガラアドの奇蹟をとおして騎士道世界が表現される。この場としての「出来事」の^{アヴァンチュール}アクチュアルなかたちがすなわち椅子、siege なのであり、そこに迎えられる者が世界に実在化した「私」なのである。時が経つにつれて、クレチアンの「危険な寝台」が「危険な座席」に姿を変えていくのは、囲いをもつ椅子の方が、ある騎士の冒険が身体的経験として沈澱される個別的な出来事の場としての適切なイメージをそなえて

⁴⁶ *La Queste del Saint Graal; Roman du XIII^e siècle*, édité par Albert Pauphilet (Paris: Librairie Honoré Champion, 1949) 4-35. 邦訳『聖杯の探求』天沢退二郎訳(人文書院, 1994) 15-62.

いたからだろう。

また、寝台のうえの身体は、あくまでみられる身体であり、そのまなざしは寝台の外部から、つまり世界から投げ出されていた。しかし、siegge のなかにすわると、箱の壁が世界の流れを堰き止め、坐り主はまなざしを操って世界を随意に切り取れるようになる。Siege がそこにすわる騎士の名を刻むように、個別(particular)の箱空間は坐り主の身体を世界に定位するが、この世界は同時に坐り主がすわることによって発生した箱の内部でもあり、またその者がみずからの視点で切り取った風景なのである。それゆえ、siegge の箱は、人がじしんの身体と世界を関係づけ、世界を選びとる基準とする場、「ここ」になる。「ここ」のなかにみずからの身体を境界づけた騎士は、箱の内在世界において他者の身体と隔離され、さらに自己の身体と外部世界とを隔てる「私(private)の場所」をみいだすことになるだろう。Siege が「ここ」として、そしてprivateの場所(席)として占有されたとき、身体は、箱が本来開かれるものであることを忘れ、外部にその身体を開くことをやめるのである。

円卓の食席にみたように、この siegge の箱はしかし、他者の視線がないところにはもうけられていない。Siege は、他者のなかの「私の席＝場所」なのである。そのいっぽうで、siegge は壁をそなえて、半ば他者の視線を遮ることによって「私」の場所を確保している。騎士は、他者の視線を浴びつつも、「私」の場所をもつのである。Siege のなかの「ここ」が「私」の場所のはじまりだとすれば、それは他者のなかにもうけられた「私」の席であり、逆にいえば、他者のなかに「席」をあたえられた者が「私」を経験しはじめたといえよう。「私」は、クレチアンの寝台のうえにまずみられる身体としてあらわれ、「石」にその場を胚胎し、個別的な siegge においてはじめて「私の席＝場所」をもつにいたったのだ。

冒険は「私」の経験である。冒険をするたびに「私」が反復されて、出来事がかたちをなしていくかのように、私の席(siegge)の壁が高く強固になっていく。この壁の形成を、先ほどの図像(図版2, 3)に確認することができるだろう。Siege は、いわば「私」の反復の結果、すなわち痕跡なのである。その「私」は、siegge にすわるという冒険を実在化する身体の運動によって、世界に表現される。Siege は、「私」が世界に実在する「場所」なのだ。Siege のかたちをもって現前し、実在したすわる「私」の身体には、過去の出来事も、そしてこれから起こる未来の出来事も、可能なものとしてふくまれているのである。

Siege のなかの「私の席」—世界の分節化

チェストのうえに複数でふれあひながらすわる身体は、チェスト内の濃密な空間とその内部が象徴する外部世界のあいだに位置し、その身体とチェストが形成する空間とは相互に浸透しあっていた。中世史家アーロン・グレーヴィチは、中世の詩の登場人物は、人物が占める空間と「一種の融合状態」にあったと指摘したが、この状態は、チェストが形成する空間とそこにすわる人とのあいだにもあてはまる。このようなとき、「空間は個人の知覚によって分割されることもなく、測られることも」なく、⁴⁷ また、そうした空間に住む中世人は「自己を遠心的に認識し」、「『自我』を自分を取りまく世界に投影し、それによって外界は彼らの個性を吸収したのである。」⁴⁸ だが、その個性とは（中世に「個性の分断しがたい一体性という理念」の習得に最初の一步が踏みだされたのだが）、社会的に鑄造され、かつ集団に投影されるものであり、いわば典型的、類型的なものであった。人間は、一定時に一定の性質の支配下で行為する操り人形として描写されたのである。⁴⁹

ところが、siege の「ここ」を基点にして、ルロワ＝グーランのこばをかりれば「放射的」に、⁵⁰ すわった人のみずからの視点で選び取られた世界は、マップとして鳥瞰的に、かつ方位をともなって認識されるようになる。このとき、世界像は、方位を欠いたまるいかたちではなく、方角をしめす矩形の空間として、まさに箱のなかに詰め込まれて捕捉されるようになるだろう。箱は、世界像のミニチュアであり、その内部には人間の身体的オリエンテーションにもとづいた世界像が濃縮されているのである。

また、ガラアドがすわるような矩形の席 siege が発生した 13 世紀には、貨幣経済の発達をみた都市では、切りきざまれた空間が売買の対象となり、私有されるものとなっていたことも、siege を占有する人物の登場を語る文学および視覚的表現の出現に連なっているとおもわれる。キリスト教徒は、ある特定の空間に執着せず、少なくとも意識のうえではキリストにならってさまよい歩

⁴⁷ アーロン・グレーヴィチ『中世文化のカテゴリー』川端香男里・栗原成郎訳（岩波書店、1992）95, 123.

⁴⁸ アーロン・グレーヴィチ、440.

⁴⁹ アーロン・グレーヴィチ、430-443.

⁵⁰ アンドレ・ルロワ＝グーラン『身ぶりと言葉』荒木亨訳（新潮社、1973）315-318。「放射空間（Espace rayonnant）」は定住民族が認識する空間であり、狩猟採集民が移動生活のなかで線のようにたどって認識するような空間は「巡回空間（Espace Itinérant）」である。

いてきたが、place が space として区切られるようになったときから、その空間認識に決定的な変化がおきたという。⁵¹

こうして箱のなかで人間が「求心的に」世界を理解し、その世界を私有しはじめると、世界は人間にとってより具体的になり、分節化され、計測可能なものになる。このことを、15 世紀末のイングランドでトマス・マロリーが著した『アーサーの死』(*Le Morte Darthur*)の最後の場面に検討してみよう。

アーサー王は、ランスロットと不義の関係を続けたグィネヴィアを火刑に処する命令をだすが、妃はランスロットによって救いされる。王がランスロットの城を攻囲(siege)するために王国を留守にすると、息子モルドレッドが謀反をおこし、それが原因となった戦いで王は瀕死の重傷を負い、王国も崩壊する。この惨状を知ったランスロットは、グィネヴィアをアームズベリに訪ねる。グィネヴィアはその地で尼僧となり、悔悟の日々を送っていた。かれは妃に最後の接吻を求めるがかなわず、その後、グラストンベリで苦行に励む。ある日亡霊が、アームズベリにいき王妃の亡骸をグラストンベリにあるアーサー王の墓の傍らに埋葬するように告げると、ランスロットはグラストンベリからアームズベリまで 30 マイルほどの道のりを 2 日かかって歩いていく。だがグィネヴィアは、かれの到着の 30 分前に息を引きとっていた。ランスロットは、王妃の遺体をグラストンベリに運び、王の隣に葬る。以後ランスロットは悲しみのあまり病み衰え、ついにかれの靈魂は天使によって天国に運び上げられる。⁵²

マロリーの独創性を研究した W. L. ゲリンによれば、マロリーが描いた円卓の崩壊は、中世のキリスト教的世界観にささえられた神の国を再現する理想の社会としての円卓と、原罪を背負う人間によって形成されねばならなかった円卓という、円卓の二重性に起因する。⁵³ マロリーは、アーサー王をキリスト教

⁵¹ Richard Sennet, 188.

このような空間認識は、中世ヨーロッパの都市形成とも密接に関わっている。都市もまた壁のなかに築かれると、方位が重要となる。ルロワ＝グーランによれば、「中世の都市は、方位が守られ、東西南北に通じる二つの通りで天空につながっている。至聖所は、中央の十字路口付近に置かれ、十字架や、ときには一つの黒い石が都市構造の理念的な中心のしるしになっている。教会もまた、方位がきめられていて、空間的な統合の図式は伝統の次元に属している。」アンドレ・ルロワ＝グーラン, 327.

⁵² Malory, Book XXI, 718-726.

⁵³ W. L. ゲリンは、マロリーはランスロットとグィネヴィアの聖性を最後に強調し、禁欲者として死んだ二人に靈魂の救済への道を開いたと論じた。ランスロットとグィネヴィアの禁断の愛が最終的なきっかけとなって円卓もアーサー王の国も崩壊するのだが、その崩壊が二人を究極的に

国の王として際立たせ、円卓を人間の美德と地上における精神性を具現するものとしてみなすいっぽうで、地上は天国にはなりえず、人間はいまだ救済されてはいないということを主張するのである。13世紀人ダンテは、人間が浄罪されていく過程を『神曲』にうたうことができたが、13世紀を境に騎士階級が危機に瀕し、宮廷生活が一変した15世紀末の状況を目撃したマロリーは、地上に天国を再現することに失敗した中世人の悲劇を表現しなければならなかったのだ。ゲリンは、マロリーのアーサー王物語に、中世の終焉をみている。⁵⁴

この悲劇の軌跡を、中世文学における攻囲(戦)としての siege のイメージの変容にたどることができる。14世紀末のチョーサーの『カンタベリー物語』に登場する巡礼の一人の騎士が、馬上槍試合を催すために造られた石の壁で囲まれた円形試合場を"a noble theatre"になぞらえたように、かつて騎士の力や勇敢さを象徴した siege は、14世紀末には騎士道の盛期を回想するための一種の懐古的な「劇場」として文学にあらわれるようになる。⁵⁵ この劇場においてのみ、ある領主が騎士たちに"Do now youre devoir, yonge knyghtes proude!"と命じたように、騎士は騎士たる義務を尽くすことができるのだ。⁵⁶

マロリーも、戦術としての siege に大きな変化をみてとっていた。モルドレッドは、父であるアーサー王を裏切ってグィネヴィアをロンドン塔に包囲すると、激しく攻撃し、兵器を投げ入れ、"grete gunnes"で打つ("he layde a myghty syge aboute the Towre and made many assautis, and threw engynnes unto them, and shotte grete gunnes").⁵⁷ この"grete gunnes"は、(最近の研究では、大砲というよりは伝統的な攻囲の兵器であると論じられているが)中世的な siege の戦術を根本から変えてしまう"gunnes"という新兵器を、マロリーが「ロマンスの作法の裂け目として、またみずから記念碑的に書いた騎士道が衰退したこと

救いにみちびくというパラドックスがここにある。Wilfred L. Guerin, "The Tale of the Death of Arthur: Catastrophe and Resolution," *Malory's Originality: A Critical Study of Le Morte Darthur*, ed. R. M. Lumiansky (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1964) 247, 270-271.

⁵⁴ Wilfred L. Guerin, 272-273.

⁵⁵ Winthrop Wetherbee, 207-223. Wetherbee は、*Sir Gawain and Green Knight* と、チョーサーの *Troilus and Criseyde* および *Canterbury Tales* の "The Knight's tale" から、siege のイメージの変化をたどり、public なありかたと private な「私」とのあいだで葛藤する騎士の姿を描出している。

⁵⁶ Geoffrey Chaucer, "The Knight's Tale," v.1885 ("a noble theatre"), v. 1888 ("Walled of stoon"), v.2598 ("Do now ... proude!"), *The Canterbury Tales, The Riverside Chaucer*, Third edition, ed. by Larry D. Benson (NY: Houghton Mifflin Company, 1987) 50, 60.

⁵⁷ Malory, Book XXI, i, 707.

をしめす兆候として」書き記したものと指摘されている。⁵⁸

ところが、siegge が攻囲の壁をこのように薄くしていった流れに逆行するかのように、写本の細密画に描かれたアーサーの座としての siegge はその囲いを厚くし、中にすわる王の身体を覆うようになるのだ。

1400年頃に制作された大英図書館所蔵の Additional 写本を調べたところ、アーサー王は、ダンテ椅子とよばれる折り畳み式のスツールにすわる姿で細密画に描かれていた (MSS. 10293, 45r., 10294, 68v.)。この種のスツールは、領地を移動しながら生活した王の身体とともに運ばれ、移動先の居城で特権的地位を公的に表現する具であり、王の身体を周囲と画すことはしない。こうしたスツールの玉座にすわる王の身体は、国家という機械として現れる象徴的な身体ではなく、公人でもあり私人でもある身体なのだ。

けれども、14世紀半ばの細密画で、siegge の玉座についたアーサーの政治的身体は、先にふれた「放射空間」の基点として在ることを表すかのごとく、まさに箱のなかに入れられており、さらには永遠化されてもいる (図版4)。こ



図版4. Arthur Enthroned. Lancelot and Guinevere. Cabinet des MSS, Fonds français, Bibliothèque Nationale, Paris, 755. f. 2^v. *Tristan*, c.1330-1350. Italian School.

Roger Sherman Loomis, pl. 325.

⁵⁸ Winthrop Wetherbee, 222.

の箱のなかの身体は、国境が規定され防衛されるようになった閉じた王国を具現するとともに、キリストを模倣する、あるいは神を代理する「完成態」として、私的欲求よりも公的人格を優先する王の政治的身体を圖像化したものである。⁵⁹ 不動の姿勢をとる王が、おなじような坐像で描かれるキリストの身体イメージに重ねられたように、⁶⁰ マロリーのアーサーは「私」の身体と、王であることを公的に具現する身体という、E・カントーロヴィチが論じた「二重化された王の身体」を表現していよう。アーサーはランスロットの siege を攻囲しなければならなくなったとき、「王であるこの身が呪わしい！」と嘆くが、⁶¹ それは円卓の騎士団を失ったからであり、妻を失ったからではない。いっぽうでアーサーは、涙をみせ、気を失い、後悔もするのだが、その自然的身体は最後の戦いでふかい傷を負うと、アヴァロンに運ばれ、隠されてしまうのである。以後、「神秘体」となったアーサーの身体は、王として、救世主として復活を待たれることになるのだ。

このような変化の背景として、公共的空間における siege という個別の座＝私の場所の出現を見逃すわけにはいかない。王が「完成態」としての siege の箱のなかに身体を閉ざしたことと、個別的な「私の席」としての siege がその座のなかに「私」と私的領域を出現させたこととは、表裏の出来事なのである。

この点で、中世の挽歌を響かせながらマロリーが創案した、瀕死の王が唯ひとり残った家来にいった最後の言葉はきわめて示唆的である。「[あなた自身を]はげますのだ。できるだけのことをやってみなさい。私を信頼してまかせようにも、もうそれだけの責任は私はとれないのだ。」⁶² この言葉は「円卓の悲惨な崩壊」の宣言であると同時に、救いへの道は個々人の死によってのみ開かれる

⁵⁹ エルンスト・H・カントーロヴィチ『王の二つの身体』小林公訳（平凡社、1992）参照。

⁶⁰ 王を最上位におくピラミッド型の社会構造が王の坐像にあらわされた。玉座は權威の源であり、その台座は民衆を象徴した。ジャン＝マリー・アポストリデス『機械としての王』水林章訳（みすず書房、1996）15。A. C. Dantoによれば、ベッドやテーブルは人間の生理的なリズムが要求するときにしかが用いられないが、椅子はそのようなリズムとは無関係に利用され、しかもそのうえで人間は姿勢を維持するために自制しなければならない。こうした人間の力を象徴する椅子が玉座となった。また地面から「あがる(elevation)」という意の *bakki* と関連するベンチが、裁判官の席になったのも同様な理由による。Arthur C. Danto, "The Seat of the Soul," *367 Chairs* (NY: Harry N. Abrams, 1988) 8-9.

⁶¹ Malory, Book XX, ix, 685.

⁶² Malory, Book XXI, v, 716 ; 邦訳『アーサー王の死』厨川文夫訳（筑摩書房、1986）435.

というアーサーの悟りの言葉である。⁶³ 円卓、すなわち中世的な世界観が崩壊したいま、神の国をうつすとされた地上の国はもはや導き手にはならず、救済の道は個々がみつけなければならないのであり、精神生活は「私」がになうものとみなされるようになったのである。⁶⁴

この「私」に託されたあがないの行為を、マロリーはランスロットにあずけている。そのさい、マロリーがランスロットに救済への途を歩かせるためにおこなったことは、かれをこの世界に根づかせることだった。中世文学では、空間移動のうちに内的変化を経験して救済に導かれる聖杯探求をする騎士や巡礼が登場するが、⁶⁵ マロリーのランスロットのばあい、聖杯探求の旅では王妃を愛した罪は浄められることはなく、⁶⁶ 最後の場面のグラストンベリとアームズベリを往復する移動によってはじめて贖罪にむかう心的変容を経験する。⁶⁷ ここに現れるのは、騎士としての公的な存在と、王妃への愛に苦悩する「私」とのあいだに生きながら、「私の場所」を探し求めたランスロットの姿である。

⁶³ Wilfred L. Guerin, 274.

⁶⁴ 王としてのアーサーが具現した公共性が、軍隊と官僚制が司る公権力にとってかわると、近代的な意味における私的生活圏と公的生活圏が分かれていく。このような空間環境において、身体をおさめる「私の席」がどこに定置されるのか、問題はいつそう複雑化してくる。これについては別稿にゆずる。

⁶⁵ アーロン・グレーヴィチ, 105.

⁶⁶ 聖杯探求の旅にでたランスロットは「荒れた森」を彷徨うだけで、道を見つけられぬまま「荒れ地」にたどりつく。そこには聖杯が安置された礼拝堂があるのだが、かれはなかに入ることができずに眠りに落ち、聖杯探求を失敗に終える。Malory, Book XIII, xvii-xviii.

⁶⁷ マロリーが典拠のひとつにした13世紀のフランス語の散文ロマンスの *Mort Artu* は、ランスロットのグィネヴィアにたいする騎士としてのふるまいを賞賛し、最後の場面でもランスロットの罪ではなく、新生をえたかれの精神的な実践を強調し、騎士というカテゴリーにはめたランスロット像を形成した。マロリーが依拠した14世紀の英語頭韻詩 *Le Morte Arthur* は、フランス語のロマンスにはなかったランスロットとグィネヴィアの別れの場面を挿入し、王妃の自己非難とランスロットの最後の接吻の要求をくわえることによって二人の恋愛感情をとりあげた。これを引きついでマロリーは、別れの場面で王妃への愛ゆえにみずからすすんで名声も犠牲にしたランスロットの愛の深さと過去の思い出に焦点をあて、人間的な苦悩に苦しむランスロットを描いた。F. Whitehead, "Lancelot's Penance," *Essays on Malory*, ed. J. A. W. Bennett (Oxford: Clarendon Press, 1963) 104-113. マロリーでは、ランスロットの亡骸は、グィネヴィアを運んだ柩台に載せられる。二人は、おなじ柩台のうえで、死から埋葬までの時間的かつ空間的な推移のあいだを経験する。かれらの抱擁は、境界過程でしかゆるさされないものなのである。

マロリーが描いた「私的な」ランスロット像が19世紀のイギリスで、文学や芸術の題材として頻繁にとりあげられる。19世紀イギリスのランスロット像については、Eriko Yamaguchi, "The 'Defence of Lancelot': Rossetti's Quest for 'God's Graal,'" *Studies in Medievalism*, 4 (Cambridge: Boydell & Brewer, 1992): 235-246.

そのランスロットの最初で最後のあがないの道程を記述するにあたり、マロリーは、アームズベリとグラストンベリのあいだの距離を、30 マイルそこそこと記している。この数字は、マロリーが典拠とした作品（13 世紀の *Mort Artu*, 14 世紀の英語頭韻詩）にはみられず、マロリーが独自に書き入れた数字である。⁶⁸ 中世文学では主人公が一昼夜にして空間をとびこえてしまうという離れ業がしばしばみられるが、マロリーは、アーサー王物語に登場する地名を合理的に位置づけ、物語を脱神話化しようと試みた。⁶⁹ 30 マイルという数字、そしてその距離を歩くのに衰弱したランスロットが要する 2 日間という日数の設定もマロリーのそうした作業のひとつである。

この地理的合理化ないし距離の数量化は、先に述べた *siege* のなかに出現した「私の場所」からみる視点によって、世界が具体化され、測定されるようになったという動きと呼応する。近代への幕があがろうとする 15 世紀末に、その「私の場所」から選びとられ、分節化される世界を知ったマロリーにとって、30 マイルの道を 2 日間かかって歩くというアクチュアルな運動が、アーサー王の宮廷で最も光輝を放ち、特権的な *siege* をあたえられながらも、最高の *siege* を息子ガラハッド（ガラアド）に譲った罪人ランスロットの魂のあがないのために必要だったのだ。ランスロットはその 30 マイルという限られた道程と、2 日間という限られた時間において、歩くという運動のうちに、ようやく世界に実在する「私の席」をみいだしたのだった。そのランスロットの亡骸をかれの *siege* である「喜びの砦 (Joyous Garde)」に埋葬し、マロリーはみずからのアーサー王物語の幕を引くのである。

おわりに

砂利の上を揺れながら、馬車は砂利だらけの平地を、ドロゴのなじみの道を進んでいったが、今度の旅が最後だった。腰かけの片方によりかかって、車輪がものにぶつかるたびに、頭をふらつかせながら、ドロゴは、しだいに低くなって行く砦の黄色い城壁をじっと見ていた。

あの上でドロゴは、世間から隔離された生涯を送った。敵を待って、

⁶⁸ Malory, Book XXI, xi, 722 ; "Than syr Launcelot toke his seven felowes with hym, and on fote they yede from Glastynburye to Almsburye, the whyche is lytel more than thirty myle, and thyder they came within two dayes, for they were wayke and feble to goo."

⁶⁹ George R. Stewart, Jr., "English Geography in Malory's 'Morte D'Arthur'," *Modern Language Review*, xxx (1935): 204-209.

三十年以上も苦しみとおした。北のよそものが来襲したいま、ドロゴは追いだされたのだ。ところが下の町で、気楽な楽しい生活を送った同僚や、そのほかの連中が、あの峠道へ、高慢な笑みを浮かべて、栄光を分捕りにやってきたのだ。⁷⁰

これは、20世紀のイタリアの作家ブツァーティの『タートル人の砂漠』(1940)の最後の一節である。ジョヴァンニ・ドロゴは、俗世の仕合わせを捨ててよそもの来襲を30年間砦で待ちつづけたが、その異邦人が砂漠に姿をみせたときには、彼は病に冒され、砦から降りることを命じられる。見知らぬ者たちのなかに送りかえされたドロゴは、茫然自失の状態を抜け出せずに、宿の一室で最後のカードである「死」に挑もうとする。かれはついに「闇のしきい」をまたがねばならない。ドロゴの生の場所は、あの黄色い砦、siegeのなかだけだったのだ。

これまでみてきたことをふりかえれば、20世紀の兵士ドロゴの唯一の「私の場所」が、砦だったことは意味深い。わたしたちは、その場所の発生を、siegeという中世の砦と、アーサー王物語の騎士たちが個別的にすわった siege にたどってきたのだった。

ノルベルト・エリアスは、中世においては、後に礼儀作法が形成された時期にみられる「人間の体と体の間に、人間を抑制し分離して現にそびえ立っているように思われる、あの情感の目に見えない壁」ができあがっていなかったと述べた。⁷¹しかし、13世紀初頭に「私の席」が siege と記されはじめ、その椅子が壁のように身体を包囲するようになったときに、自他の身体を隔てる壁がすでに現れていたのではないか。中世の食席では大皿から食物を手を使ってとったことから、作法書に食事中に鼻や耳をさわらないようにと他者への気遣いを念頭においた注意が書かれているが、それとならんで指定席につくことがくりかえしいわれるようになるのも、siege 空間の形成と無縁ではあるまい。その siege の壁は、まだ強固ではないのかもしれない。けれども、「食席」に集う他者のなかに特権的な個別の座が出現したことに、他者の身体があるがゆえ

⁷⁰ ブツァーティ「タートル人の砂漠」奥野拓也他訳『パヴェーゼ/ブツァーティ/モラーヴィア』世界文学全集33(集英社、1966)248.

⁷¹ ノルベルト・エリアス『文明化の過程—ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷』赤井・中村・吉田訳、上下(法政大学出版局、1977)上168-169.

のそれから画される自己の身体、そしてその身体が定位する「私の場所」へむかう意識をみないわけにはいかない。Particular が private に意を変えるとき、近代の時空への扉が開かれ、世界は実体を失い、もはやひとつに統合されたものではなくなるのである。

Siege の箱のなかで、他者との接触も外部世界との交流を断った身体は、座を占有しただけでなく、逆にその場から所有されることにもなる。寝台のうえの「みられる身体」は、王権の代表的具現を公的に表現したが、その身体は舞台のうえから、箱の内部に隔離されてしまうのである。この個別的な身体的場のなかに身を置きすわった人間は、「私」の場所を、世界の基準「ここ」として、かつその場所を背負いながら、みずからの身体と世界とのあらたな関係を模索しはじめていく。宇宙の環流のなかに置かれていた身体は、「私の席」を、みずからの視点で選び取る世界のなかに探しはじめることになる。その席にすわる者は果たして「自由」なのだろうか。この疑問に答えるまでに、「私」の身体は、遠く、遙かに遠いところで、だれかに、なにかに、くりかえしこう問いかけつづけずにはいられないだろう—「あなたには私の言うことがどう聞こえるのか。私はこんなに遠くから話しかけている・・・」⁷²

⁷² René Char, *Feuillets d'Hypnos* 88, 197. "Comment m'entendez-vous? Je parle de si loin..."